

大江健三郎『僕が本当に若かった頃』論

——二人の〈家庭教師〉の仕事を中心として

鈴木 恵 美

はじめに

大江健三郎『僕が本当に若かった頃』（新潮）一九九二・二の先行研究は非常に少ない。秋山駿は小島信夫・木崎さと子との「創作合評」（『群像』一九九二・二）で、テキストは現代の問題が多く描かれると指摘し、「これは大江健三郎が、またもう一つ変貌しようとしてやっている努力の一つである」と捉え、「僕が本当に若かった頃」（『全著作・年譜・文献完全ガイド 大江健三郎事典』森田出版、一九九八・九）は、初期の作品には見られなかった大江の九〇年代の認識として注目されると述べる。川本三郎「大江健三郎——動き続ける新しい過去を再検討する」（『文学界』一九九二・九）は、痛ましく、哀切で、過去へと閉じていかず、未来へかすかに開かれている、とりわけ素晴らしい作品とする。小島信夫・秋山駿・木崎さと子前掲合評は、少年の「心の傷」が作品の底流にあり、靖一叔父が自分の「心の傷」の為に、「僕」と女性をまき込んで自殺を図ったという。また「僕」の正体が不明で道化師のようであり、叔父もわかりにくい為に、私小説か否か判らないとする。小島氏は「おとぎ話」と見なす。主題について秋山氏は、「心の傷との共生」と、「傷

を負いながらも生き延びる」ことであるとして、少年と叔父の「心の傷」は判るが、「僕」の「心の傷」は「異質」であると指摘する。木崎氏は、「心の傷」が文学的に扱われるなかで、繁が「亡命」したアメリカの科学者の世界は「記号化」する世界であり、人の生涯も「記号化」される世界であるとしている。川本三郎前掲合評は、現実以上にアクチュアルな姿を見せる過去を思い出す「僕」の行動が自身の「傷」・負い目・罪愆感を確認すると述べて、大江の作品がモラルをめぐるストイックな物語になるのは根底にある罪障感への強い自覚の為であるという。篠原茂前掲論は、事故の真相が明らかにされて叔父への罪障感が軽減されても、事故が「ある力」と「それを越えたもの」との働きで起きたかもしれないという「一種の救済への願い」が、あいまいな形ではあるがはっきりと提示されるとする。先行研究ではこのように、解釈が部分的指摘にとどまり、作品世界を十分に解き明かしたとはいえない。

本稿ではテキストを独立した作品世界として捉える。そして「僕」と繁、叔父と繁との関係性を、〈家庭教師〉という仕事を中心に考察して、叔父の自殺の理由を明らかにし、繁の「亡命」の意義を明示する。さらに主題について言及し、テキストが「おとぎ話」では

なく、現実の問題を扱った小説であることを検証する。

一 〈家庭教師〉としての「僕」

小説家の「僕」(K)は、〈家庭教師〉をした繁が三十五年後、「日本における高い水準のサル研究を展望する浩瀚な本」¹⁾に書かれた、筆者から感謝の言葉を捧げられている日系アメリカ人の学者になったことを知る。繁の母親は、薬品会社を経営する家の跡とりである彼を理学部に進ませることを希望していた。彼は暁星学園高等部一年の夏に、北海道で無免許による自動車事故を起こして、叔父と若い女性の二名を死亡させる。叔父に飲酒運転の「汚名」をさせた繁は、叔父の別居中の妻(夏枝)の勧めでアメリカに「亡命」する。「僕」は彼が学者への道を辿ることを夢想する。やがて「僕」は、DNAフィンガープリント法の研究に功績があるシゲという教授が、「僕」の「いちばん良い作品」は「僕が本当に若かった頃」であると言ったのを知り、彼が繁と判る。この小説は、「僕」が「四才年下」の繁に「成功する小説」を書くよう誘われて合作を試み、事故で「宙ぶらりん」になった「試作品」であり、「完成すらしなかった小説」である。テキストは、繁の「亡命」から三十五経った今、「合作しようとした長篇小説」が「僕」の「再検討」で完成する物語である。「僕」は、自分がかつて繁と共有した時間についても「再検討」するという自覚を持って、回想を始める。

四国から上京後東大の仏文科に進学した「僕」は、繁の〈家庭教師〉をする。当時は「戦後まだ十年たったのみ」の時代であり、「僕」は揺れ動く社会に生きているという思いが基本感情で、服装や食事の貧しさを気にかけることもない。一方繁は「四才年上」の「僕」

と同じ身長があり、「太腿が擡のかたちをして遅しく、圧迫されるよう」という身体的条件に、安定した時代の始まりを現す高校生だった。「僕」の〈家庭教師〉としての仕事は、繁の「理科系の学科はよくできるが、基礎をなす数学、それにフランス語、英語、国語が思わしくない成績」の向上であり、一学期で向上しないと解雇されるという厳しい条件が課されていた。

ところで「僕」には、次のような「哲学」があった。

人間は言葉で理解する。一瞬の電気の流れのようにして理解すると、これまで思っていたのは錯覚。一瞬の電気の流れを言葉に還元してはじめて世界のことがかかる……

自身の「哲学」から、全ての基本的な勉強は文章に書くことで進めることができるという勉強の「方法」を案出した「僕」は、この「方法」を年下の相手に試したい気持を抱いていた。「僕」の「方法」に繁は大いに抵抗するが、成績は飛躍的に向上した。繁に関する限り、「僕」はこの「方法」が正解だと判断するのである。「僕」は祝賀の夕食に招かれたことで、彼の家族の一員になったと安心する。正式に備われた「僕」に繁は、「僕」の小説が「成功する小説」になる為の取材旅行に誘う。苦学生である「僕」は、繁を通じて両親から解雇されるのを怖れて、彼の言いなりになる。しかし「僕」が彼の計画を冷淡に却下できないのは、自身の小説家として成功したいという野心の為であった。繁は「僕」に免許を取らせ、実際の運転は自分が受け持つ計画を立てる。「僕」が「——しかし、繁君はまだ十六歳だから、運転免許がとれないでしょう」と言うと、繁は

「——それだけが問題なんですよ（中略）家に縛りつけられてはいないですよ」と答える。繁は両親に反抗し、家から自由になることを願っている。しかし彼は父親に計画の許可を求める時には、母親の援護を頼む。また「僕」の教習所の費用や日当も母親に払わせる。繁は精神的に甘えた人物である。彼は自分の欲望の実現の為に、「僕」や両親を平気で利用する。

だが「僕」は本当に繁の家庭に受け入れられたのか。育ちの良さのあきらかな繁の父親は、僕が小説家になる夢を抱いていることを知ると、「そのような才能は貴重ですよ、冗談半分にしてみましたってなりませんよ」と「知的な牛のような眼」で励ました後で、「しかし先生は冗談でなにかなさるようには見えず、小説を書く人にも見えませんな。……中学か高校の先生に見えますよ」と本音を語り、「僕」に分相応の職に就くことを命じる。繁の父親は本心では「僕」を軽んじている。

「僕」が初めて出会った時の靖一叔父は、三十五、六歳の目立って高くきれいな額をもった容貌の持主で、時代を超越した感じの茶色の詰襟を着て、いかにも懐かしげに繁を眺めていた。叔父は繁に深い愛情を抱くが、繁は叔父に反撥して、幼く突っぱって無視している。「僕」の前に繁の〈家庭教師〉であった叔父は、繁が自分に反抗して成績向上させなかったことを知っている。「僕」は叔父に、解雇を怖れて急場しのぎの成績向上を試みたという、「自分のしていることの底の浅さを見ぬかれているようにも感じ」、「赤面する」ようであった。教習所で免許を取ろうとした「僕」は、左眼の弱視が判る。「僕」の代わりに叔父が繁との旅に同行する。叔父は、「僕」が「繁君とのドライブの間お互いにノートを声をあげて読み、一問

一答するかたちで授業をすすめる準備をしたのは、繁の運転をあらかじめ認めているからだと見抜く。叔父は聡明な優しい人物であり、無邪気な「僕」の愚かしい行為を黙って補おうとして同行を決意したのである。しかし「僕」と繁は、彼の気持ちに全く気づかない。叔父は「僕」の身代わりに、飲酒運転の「汚名」をきせられて死んでしまう。

「僕」は、〈家庭教師〉の仕事の時給目当ての労働として捉えている。しかし叔父は、〈家庭教師〉の本来の意味である「家庭に招かれてその子女の教育をする人」という家庭教育の担い手として、繁の人格教育を行うことが〈家庭教師〉の仕事であると考えている。叔父は古典的・伝統的思想の体現者であり、言葉の本来の意味に従って自身の行動規範を定める。「僕」は叔父に比べると「新しい世代」の若者であり、言葉の意味を流行に従って解釈して行動している。

繁は自動車への情熱を強く持っており、その為に無免許運転による旅行を計画する。叔父が彼の計画を察知した発言をすると、彼はバツと肩を振りたてるようにしてふりかえり、黒くろした眉を極端にしかめて叔父を睨み、「——許可も受けずに、他人のテリトリーに入らなくてください！」と叫ぶ。繁は叔父の聡明さを内心では怖れている。

さて「僕」は繁の部屋に入るとすぐに、彼の書物が「ライフ」などのアメリカ雑誌だけで、本棚の中の書物は明らかに叔父のものだと理解する。叔父の蔵書は、主に岩波文庫の「いかにもよく選ばれたと感じられる哲学や経済学」のものであり、小説は「新しい世代」の「僕」が名前だけは知っている、古典的教養書の『エレホン』や『リイルアダン短篇集』である。繁が叔父の本に「防衛的な態度」

を示すのは、彼が叔父の教養を現実世界において役に立たないと判断しているからである。叔父は、今という時代にはリアリティーを全く持たない、古典的教養や倫理を大切にしている。「僕」は叔父を尊敬するが、繁は彼を無価値な存在だと見なす。だからこそ繁は「僕」の身代わりに、叔父を徹底的に利用することをためらわないのであった。

二 〈家庭教師〉としての靖一叔父

「僕」は左眼が弱視と判った為に、旅の同行を断念する。片方の眼が弱視でも普通免許であれば取得できるが、「僕」はこの事実に全く気づかない。フランス文学・語学の研究者になる予定であった「僕」は将来を絶望するが、「僕」はその後小説家となり、本来の夢を実現させている。

「僕」の弱視を知った繁は最初こそ腹を立てるが、やがて「少年ながら心底からの痛恨をあらわして」、「Kさんに悪いことをしてしまった！」という。そして「左眼だけ開けていた僕の視野のなかで、ノッペラボーの灰色のお地蔵さんのように見える頭を振ってペソをかいた」。地蔵は釈迦入滅後、弥勒が出現するまでの間現世にとどまって衆生を救い、また冥府の救済者とされて、民間に観音と並んで広く信仰され、子供の災厄を守護すると信じられた存在である。⁽⁵⁾「僕」の弱視の視界は、現実世界の「もう一つの真実」を見る。この時「僕」は、繁が〈矯正教育〉によって邪悪な性質が正された場合、彼本来の良い性質が顕現する可能性を見たのである。

ところで繁は叔父のことを「靖一オジさん」と呼び、身内とは認めない。繁は、「中国の戦場へ出かけるまで大学でも西洋史の、教

授が養成されるコースに乗っかっているブリリアントな学生」で、大学院を終えるとすぐに母校の講師となり、映画輸入に携わる夏枝と結婚し、理想的なカップルに見えた過去の叔父のことは尊敬するが、隠遁生活を送る現在の叔父のことは軽蔑している。その為繁は叔父を傷つける様々な行動をとる。

例えば繁は「僕」に、「成功する小説」に必要な挿話をつくるのだと言つて、夏枝を誘惑させる。繁は夏枝について、「つまり、性的に自由な人」だと無責任に言い放つ。彼は叔父を傷つける為には、夏枝を利用することをためらわない。このような行為は彼にとって「気晴らし」の「ひとつ」にすぎないのである。繁に酒を飲まされた「僕」は夏枝を誘うが、彼女は次のような理由を述べて断る。

——嫌よ、私は靖一さんを気の毒に思うから、あの人を知っている男とはやらないの。

「僕」は「安堵の思い」で、「——あなたの答えが正しいから……」といった計画を中止する。夏枝は「僕」を胸に抱きよせて、「ねんごろにキスしてくれた」。やがて「僕」は彼女の真意に気づく。

あの人は深いつきあいでもない人間が酔っぱらって自分のベッドに裸で横たわっている、その異様な出来事に腹をたてるところか、——それでは、やりますか？ という呼びかけに応じなかったことで自分をギルティーに感じていたのだ……

「僕」は夏枝が、夫（靖一叔父）の苦悩を救えないことに罪の意

識を感じていることや、彼女が別居後も尚、夫を深く愛していることを知る。「僕」は、繁の「気晴らし」の「ひとつ」に加担したことに深い罪悪感を抱く。

さて繁のことを「ブランメーカー」だと評する叔父は、現実の人生が計画通りにはいかず、時には思わぬ困難が生じるが、人間はそれをやり過ぎなくてはならないことを知っている。彼は思春期の「僕」や繁がそのことを理解できないことも判っていた。叔父は「僕」に、靖一という名前が靖国神社に由来することや、中国に兵隊として行ったこと、大学の友達はB級戦犯で獄中にいることなどを語り、そのことで鬱うつと考え込むが、実際には何も行動できないという、「だらしな話」をする。叔父の話しを聞いた繁は、「ひとつデモンストレーションのブラン」を作る。彼の「ブラン」は、軍服を着た叔父が二頭の山羊に中国の農民の恰好をさせて、竹光と思わせておいた日本刀で山羊の頭を切断し、「天皇陛下万歳！」と叫ぶという、叔父の心を傷つける内容であった。怒りの感情から「皮下脂肪のまったくついていない日灼けた顔をズズ黒いふうに紅潮させ」た叔父は、繁の人間性についての確に判断する。

——繁君は確かにブランメーカーではあるんだが、そういうひねこびた構想を持っていたとはなあ、その若さで不幸な話だねえ…… Kさんも、これではやりづらい時があるでしょう。やはり北海道への同行は自分の仕事だねえ、ともいういちど先ほどのズズ黒いふうな紅潮をあらわして靖一叔父さんはいわれた。

この時叔父は、「僕」の生命を救う決心をしたのである。また

彼は、小説は冗談のように書いたと繰り返す「僕」に、繁の父親とは全く違った意味でその弁明をたしなめる。

精一叔父さんも（中略）冗談のつもりなら止めた方がいい、小説はあらゆる作家にとって切羽つまったほどの制作なのだからといった。（中略）きみも本当に書きたい主題があったからこそ、あのように試作品をやって準備したのではないか？

小説家になるという現実離れた夢を冗談めかしてしか語らず、本気で目指さない「僕」に、叔父は「一部始終の語り手はひとつブラスの方向づけのことをやりとげている、という小説」のプロットを語ることで、「僕」が商業的な意味での「成功する小説」ではなく、過酷な現実世界に少しでも希望を見出すような小説を書くことを勧めたのだ。彼の願う小説は、価値観の変化した今ではリアリティーがなく、繁の望む映画の原作としての価値が高い小説ではない。彼の興味を引かない。ここでは叔父と繁の語る、二通りの「われわれの小説」の為の着想が平行して語られる。どちらを小説にするかは「僕」の選択に委ねられている。やがて新聞記事には、事故が叔父の飲酒運転によると書かれた為に、「僕」は大きな悔いを感じる。「僕」は叔父が、「僕」の身代わりに〈家庭教師〉の仕事を全うして死んだことに罪悪感を感じる。

結果として「僕」は、突然の弱視の発覚によって命が救われたことになる。「僕」の弱視の左眼に映る繁の姿が、子供の災厄を守護する地蔵の姿であることから、弱視の発覚は人為的な力ではない、超自然的な「ある力」の働きによることが判る。この不可思議な力

が、「僕」に免許を取る資格がないという「思い込み」をさせて、「僕」に生涯免許を取得させないのである。「ある力」の働きは、「僕」の効率主義の（矯正教育）の効果を待つ。また「僕」は、罪悪感に苦しむ夫（靖一）を救えないことに苦しむ夏枝を誘惑した行為に、今も深い罪悪感を感じる。

次に叔父の罪悪感について考えたい。彼は中国から帰還後、「中国原産の珍しい鶏」である烏骨鶏の飼育を行い、中国と日本の交流に「貢献」する形で罪を償う。叔父は怒りの感情にかられると「ズズ黒い顔に紅潮」するが、これは彼の本質が大黒天の性質を持つのである。大黒天は本来インドの戦闘神で、人の闘争心や競争心を現し、願望達成に血肉の犠牲を要求する合理的死神だが、日本の御霊信仰から仏教の最高福神に転じた神をいう。叔父は「中国大陸の風景と似ている北海道には行きたい」が、「狭い所で寝るとうなされるた、だから」野宿は無理だと語る。北海道への旅は叔父にとって中国で犯した罪を思出すという苛酷な意味を持っていたにも拘らず、彼は「僕」を助ける為に同行し、死に到る。

しかし夏枝は「僕」に、彼の死は幸福であったと打ち明ける。

——靖一さんはなにひとつ達成しないままで残念だったけれども、死んでしまったものは仕方がない。あんなに苦しく生きていたんだから、むしろホッと肩の力がぬけたらうとも感じるのよ。

彼女は、北海道という中国を思い出させる風景のなかでの叔父の死が、彼の永い罪の償いの為だけの人生をようやく終わらせた、幸

福な死であったと捉えている。

続いて繁の罪悪感について述べたい。寄生虫のエキノコックスが人間の肝臓に入ると赤んぼうの頭ほどにも大きくなるように、繁のなかには「悪」という名の寄生虫が住みつき、急速に巨大化する。彼は、若い女性を同乗させるのは「靖一叔父さんが快諾した」のであり、「自分はこれはわれわれの小説の挿話に好適ではないか」と思っており、靖一叔父さんの決定に賛成したと「僕」への手紙に書く。また彼は叔父に飲酒の習慣があると、「むしろ面白そうに」報告する。「僕」は彼の手紙の内容を信じる。

しかし彼の手紙が全て偽りの内容であったことが、夏枝の言葉によって明らかになる。

問題は繁君なのよ。靖一さんは良い年をして酔っぱらい運転で、身許も知れない女の人を道連れにして、汚名はこうむったわよ。甥には重傷をさせるしで……けれどもいまさら繁君が、ボクが無免許で運転していましたと言いついてなにになるの？（後略）

夏枝は繁の嘘を全て知った上で、彼に安易に事実の告白をするのではなく、叔父と同じように、告白をしないまま罪の償いに生きる人生を勧める。

ただ繁君の良心の問題にすぎないことでしょ？ ボクがやりました、ということ自分で自己満足してなにになる、と悪口をいうのじゃないのよ。しかし良心の課題ならば、それを告白しな

いで一生背負ってゆくのも、同じほど辛い仕事だわ。私は靖一さんの苦しい生き方をつうじてそれを知っています。最後の瞬間に、それこそ急なことだから、あの人があらためて苦しいことを思い出してさらに苦しむ、そういうことはなかったらうと喜んでいくくらいだわ……

彼女は、「……靖一さんも繁君も、負けずおとらず可哀そうな人たちねえ」と述べて、二人が罪の償いの為だけに生きることと同情する。「僕」は夏枝が繁の計画を熟知していることを知り、「自分にもまた憐憫の情をかけられているのをさとり、先だつてのねんごろなキスにこの人がギルティーを感じていると思った、そのもつとさきまで意味を解説した気持だった」と述べて、彼女が叔父と同じような聡明さと優しさを持つ人間であると理解する。旅行の間、繁は「面白がつて」、叔父の罪を「しつこく」訊ねる。追いつめられた叔父は、繁の残酷な行動から逃れようとして、自殺してしまふ。

三 〈矯正教育〉としての「亡命」

さて繁の「亡命」生活とはどのようなものであったか。繁は三十五年間、意識的に日本語を使わないという原則で生き、「もとより日本が祖国だと思ふことは決してありません」という。彼は「あの世でバツタリ靖一叔父さんという「鬼」に会つたら、それこそ取り返しがつかないと思つて」、「自分としてはできることなら火星へでも「亡命」したかった」と述べる。当初繁の「亡命」の目的は罪の償いではなく、「鬼」となった叔父からの逃亡にあった。「亡命」後の繁は事故や叔父のことを記憶し続けて、自虐的なまでにそ

の記憶を思い出すことを通じて、罪の償いをする。彼は、食べられる部分がほとんどなく、その臆病な性質から一度人間に噛みつくと離れることがないことから、人間のしつこい性格に例えられるスッポンを、あえて残酷な方法で大量に食した。「アレ」と「スッポン」を殺して食つていた自分のふるまいとは結んでいる、「アレ」をやつた人間が自分だということをいつも忘れないでいるために、むしろそれを旗印のようにふりかざしてさえして、スッポンを獲つては食つていた」という繁の言葉から、彼の「亡命」生活が、叔父の「祟り」に反抗してスッポンを大量に殺戮するという、罪の償いとは程遠い毎日であったことが判る。また繁は「亡命」生活の信条について、「僕」に次のように書き記している。

ところがこちらはいつも血まみれの思いで生きているんだ。悲惨な人間の呻き声が聞えてくる暗闇に、もひとつ石を投げる仕業なら、——よし、それはおれがやろう！ と進んで引き受けるふうだったんだよ。(後略)

では繁の罪の償いはどのようにして実現したのか。繁は「生き延びる」為に、「それだけの「貢献」はして来たからね。大学にも合衆国にも」と語る。彼のいう「貢献」とは、ヴィエトナム戦争の枯葉剤作戦に協力したことを意味する。

(前略) オ、ト、メ、化、された戦場でヴィエトナム人の女子供までが殺戮され苦しむのは承知しているけれども、そこへ心ならずも連れて行かれてひどいことをやらされているグズで憐れな若

者を、いくらかは無傷で合衆国へ帰還させることはできる、その後でかれらには国と自分の罪に苦しむ十分な余裕があたえられる。靖一叔父さんがそうだったように、また夏枝叔母さんが僕にそうすめたように、と。それはつまり僕が血まみれの思いで毎日そう考え続けていた、ということなんだが……

彼は、叔父のような罪悪感に苦しむ兵士を救う為に、自らの手を血で汚す。また看護婦をしていた彼の娘は五年前に、若くして悲惨な死を遂げる。

中毒症状のもとでは恐怖心を誘われるほどの荒れ方だったが、それがなければ本当に真面目な優しい人でした。最後は先妻がひとりで見とった。火葬した灰は、父親が孤独な青春時を過ごした島の沿岸に撒いてくれたといったそうです。(中略)——遺灰を海へ撒きました。そのヨットの上で、先妻がこういった。娘はあなたが自動車事故で死なせた可哀想な女の人のために、進んであのようになんて死んだのじゃないか、あなたへの「罪のゆるし」をあがなおうとしたのじゃないか？

彼の娘は、事故で死んだ若い女性を想わせる存在であった。先妻の言葉に繁は、「たとえそうだったとしても、しかしもうひとつの死の方は自分であがなうほかはない」と、「ただ靖一叔父さんのことを思って」考える。この瞬間彼は、娘と叔父と若い女性の三人を等しい思いで追悼する。その時ようやく繁は事故の真相が、叔父の自殺であったことに気づく。

繁にとって、「過剰」な罪の償いの日々であった三十五年の歳月の意味は何であったのか。彼は「僕」への手紙のなかで自身の容貌の変化を、大和群山市山田町という所の「松尾寺大黒天」に例える。

そいつは打ち出の小槌も持っていないなければ福ぶくしくもない、烏帽子をかぶって怒り猛った表情で、片手は上着の縁にもう片方は腰に、力をこめた拳を結んで斜め下方を睨んでいる。この三十五年間に僕が作ってきた自己イメージと、それはしつかり通いあうものだったのさ。(後略)

繁の述べる大黒天は奈良県の日本三大黒天像の一つで、インドの戦闘神の厳しい表情をしている。また恵比寿神は、大黒天とペアの存在で日本古来の神であり、生来歩けない為海に流されるが、やがて異郷から富や幸福を携える⁽⁷⁾。大黒天の性質を備えた繁や叔父と異なり、「僕」は恵比須神の性質を持つ。繁と叔父、「僕」と叔父という二組のペアの関係性は、本来の大黒天と恵比寿神のペアの関係性と同じである為に、「僕」は性質の異なる二人と共に行動が出来ない。「僕」の「心の傷」が、繁や「顔をスズ黒いふうに紅潮させた」叔父とは「異質」であるのはこの為である。

繁にとって三十五年の「亡命」生活は、「過剰」な罪悪感による無駄な年月ではなく、「矯正教育」によって反道徳的少年であった彼が、「自立」したという価値を持っている。これが繁の「亡命」の意義である。今繁と「僕」は「アレ」について、テクスト冒頭に書かれている言葉と同じ共通認識を抱くに至った。

偶然はかきなるものだ、という定まり文句を、若かった頃は――僕が本当に、若かつた頃はもとより、さらにしばらくは――根拠はないが確かによく起ることに捉えていた。ところがいまは、それが動かしがたいことと感じている自分に気がつく。生きていることのすみかさなりの傷やらしみやら、あるいはたまさかの喜びやらの総量が、かきなる偶然に対して確かにこうしたことは起るものだ、という納得をあたえている。

繁の「アレ」は「亡命」当初、事故という忌わしい出来事を意味していたが、今は人為的ではない超自然的な「ある力」によって起きた人生の必然的な出来事と捉えられている。「アレ」が起きたことで繁は「自立」し、「僕」は小説家として悲惨な現実には「プラスの方向づけ」をする「新しい小説」(「僕が本当に若かつた頃」)を書くことで、悲惨な叔父の死に「プラス」の意味づけを行う。今では「アレ」という言葉は、三人の人生を「プラス」に「方向づけ」た出来事という意味を持つことになったのである。

おわりに

テキストは、反道徳的少年であった繁が「亡命」の結果、「自立」する物語である。また「僕」と叔父という、二人の〈家庭教師〉の仕事ぶりが描かれる。叔父は、繁に過去の罪の告白を執拗に迫られ、その苦しみから逃れる為に自殺をするが、結果として繁の〈自立〉を促し、繁と自身の二人を救済した。繁の「亡命」は当初、罪の償いではなく、叔父が「鬼」となって復讐に來ることからの逃亡であった。しかし彼の「亡命」生活は、「亡命」という形式を借りた〈矯

正教育〉としての意義がある。〈矯正教育〉によって〈自立〉した繁は、「僕」と靖一叔父という二人の〈家庭教師〉を救済する。テキストはキリスト教を本当には信じていない人間が、罪の償いを形式的に利用する行為を批判している。また自分を過剰に責めるという罪の償いの「方法」は、無意味であるとする。人生の危機は、現実から逃れずに、苦悩しながらも現実をただ「生き延びる」ことで、人爲では如何ともし難い超自然的な「ある力」の働きによって、自ずと解決する。現実生活から遊離したところに、自己や他者を救済する為の〈祈り〉は存在しないのであり、〈祈り〉はただ現実を「生き延びる」なかでしか生れない。主題は、現実の問題を解決する「方法」が宗教ではなく、個人が現実生活のなかで抱かざるをえない〈祈り〉を、社会に還元させて実現させる「方法」の提示にある。

大江は、情報ではなく、自身の「感覚」で物事を判断して行動する「新世代」の若者の誕生を期待している。本テキストは「おとぎ話」でも宗教小説でもなく、現実社会の問題解決の「方法」を提示する、「現実的な小説」である。

大江は『他人の足』(『新潮』一九五七・八)において、「知的で自己欺瞞を起こさない人間」を描くが、成功には至らない。⁸⁾三十五年後の「僕が本当に若かつた頃」においてその造型に成功する。このような意義を持つ『僕が本当に若かつた頃』は大江文学の主題を考える上で非常に重要な作品であり、従来からの作品評価の高さの内実は、ここにこそ存すると断じてよいのではないだろうか。

註(1) 立花隆『サル学の現在』(平凡社、一九九一・八)をさす。

(2) 注(1)の『サル学の現在』に拠れば、「DNAフィンガープリント(指紋)

法」とは、一九八五年イギリスのジェフリーが開発。同じパターンを繰り返かえすと考えられたDNAが、同じパターンは唯一人いないと判り、指紋と同様、個人識別の標識に利用する方法。

(3) 『広辞苑 第六版』(岩波書店、二〇〇八・二)を参照。

(4) 『神経科学用語辞典』(メジカルビュー社、二〇〇三・九)を参照。

(5) 笹間良彦『大黒天信仰と俗信』(雄山閣出版、一九九三・八)を参照。

(6) 注(5)の『大黒天信仰と俗信』を参照。

(7) 吉井良隆『えびす信仰事典』(戎光祥出版、一九九三・三)を参照。

(8) 稚拙『他人の足』論——「僕」の〈意識〉をめぐる——(『国文目白』二〇〇八・二)を参照されたい。

〔附記〕「僕が本当に若かった頃」本文の引用は、『大江健三郎小説 8』(新潮社、一九九七・一)に拠った。

受贈雑誌(九)

日本文学論究

国学院大学国文学会

日本文学論集

大東文化大学大学院日本文学専攻院生の会

日本文学論叢

法政大学大学院人文科学研究科日本文学専攻

日本文芸研究

関西学院大学日本文学会

日本文芸論稿

東北大学文芸談話会

梅花日文学論叢

梅花女子大学大学院日本文学会

俳句文学館紀要

俳人協会

阪大近代文学研究

大阪大学近代文学研究会

阪大比較文学

大阪大学大学院文学研究科比較文学研究室

比較文学年誌

早稲田大学比較文学研究室

弘前大学国語国文学

弘前大学国語国文学会

広島女学院大学国語国文学誌

広島女学院大学日本文学会

広島女学院大学日本文学

広島女学院大学日本文学科

藤女子大学国文学雑誌

藤女子大学国語国文学会

文学史研究

大阪市立大学国語国文学研究室

文学論藻

文学史研究会

東洋大学文学部日本文学文化学
科研究室